

1P77

医療的ケア児の小学校就学に向けた支援に関する文献検討

岡本 奈々子¹、青柳 千春²、阿久澤 智恵子³、
小原 成美²、金泉 志保美⁴

¹東京医科大学医学部看護学科

²高崎健康福祉大学保健医療学部看護学科

³山梨大学大学院総合研究部 医学域看護学系

⁴群馬大学大学院保健学研究科

【目的】

医療的ケア児（以下、児）の就学前に焦点を当て文献検討を行い、就学に関わる人材や支援に関して考察する。

【研究方法】

原著論文と看護文献の指定を加え検索年の制限はせず医療的ケアand小児and就学、医療的ケアand小児and学校、医療的ケアand小児and保育園or幼稚園とした。医学中央雑誌（Web版Ver5）で2020年9月4日に文献検索を行った。92件から重複文献16件を除き、タイトルと抄録を精読し児の就学に向けた支援の記述がない71件を除いた5件を分析対象とした。

掲載年、筆頭著者の所属、デザイン、方法、支援対象となった児の情報、就学までのプロセスにおいていつ、誰が、誰に、どのような支援をしたのか、支援の結果に関して文献ごとに書かれている内容をMicrosoft Excelに入力し分析した。

【結果】

文献の掲載年は2000年から2019年であり、筆頭著者の所属は病院が3件、大学看護学科が2件であった。質的記述的研究が2件、事例研究が3件あり支援対象となった児は8名だった。医療的ケアは在宅中心静脈栄養法3件、人工肛門3件、導尿3件、気管切開2件、喀痰吸引2件、人工呼吸器1件、在宅人工換気療法1件であり、医療的ケアが2つ重複する児が5名、3つ重複する児が2名だった。支援開始時期は、入学1年前2件、入学半年前1件、入学1カ月前1件、就学健診時1件、記載なし3件であった。支援内容は32件抽出され、訪問看護師による支援は7件あり児、母親、学校、教育委員会等に対して医療的ケアの説明や技術指導等を行っていた。次いで病院による支援が5件あり児、家族、学校、院内関係職種、救急隊等に対してカンファレンス開催等を行っていた。母親による支援4件は児、学校、市に対して児のセルフケア獲得支援、学校に対して児の医療的ケアや身体状況の情報共有等を行っていた。その他の支援者は学校、病棟看護師、校長、小学校教諭、保育士、教育委員会等であった。支援の結果、支援対象となった8名全員が就学した。

【考察】

支援対象となっていた8名は支援開始の時期も関わる人材や支援内容も異なっていた。医療的ケア児の就学支援は個別性が高く、その仕組みは体系化されておらず症例毎に試行錯誤の状況があると考え、研究を積み重ね、支援開始時期や流れ等を含め就学支援の仕組みを構築していく必要性がある。科研費若手研究20K19142の助成を受けて実施した。

1P78

特別支援学校における医療的ケア実施体制に対する支援プログラムの介入効果と課題

二宮 啓子¹、山本 陽子¹、岡永 真由美²、
勝田 仁美³、内 正子⁴、丸山 有希⁴、熊谷 智子⁵、
清水 千香¹、萩岡 あかね⁶

¹神戸市看護大学

²岐阜県立看護大学

³兵庫県立大学看護学部

⁴神戸女子大学看護学部

⁵医療法人社団思葉会 MEIN HAUS

⁶兵庫県立尼崎総合医療センター

【目的】

本研究は、特別支援学校における医療的ケア実施体制への1年間の支援プログラムを作成・実施し、その効果を明らかにすることを目的とした。実施した3校における共通の課題と有効であった支援について報告する。

【方法】

1. 研究参加者：3校の管理者・看護師18名・教諭81名・養護教諭6名。2. データ収集方法：プログラム前後に①研究者作成の無記名自記式質問紙調査、②医療的ケアの実施・支援体制等に関するグループインタビュー調査、③会議の議事録。3. 介入方法：アクションリサーチの手法を参考に、医療的ケアの実施体制、看護師への支援に関するアクションプラン案を学期ごとに提示し、学校関係者と研究者で策定・実施・評価した。4. 分析方法：量的データは統計学的に、質的データは質的記述的に分析した。5. 倫理的配慮：研究代表者の所属大学倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】

3校からそれぞれ5つの課題が抽出された。3校に共通していた課題は、看護師と教諭の連携、危機管理で、2校に共通していた課題は、校外学習や泊を伴う行事の際の医療的ケアの体制、看護師と教諭のコミュニケーション、医療的ケアに関する教諭の困難感や負担感であった。支援として、特別支援学校の医療的ケアにおける各職種の役割に関する医療的ケア関係者の共通理解を促す研修会（講義とグループワーク）を行い、「教諭が看護師の判断をよく聞いてくれるようになり、教諭とのコミュニケーションが取りやすくなった」、「教諭と看護師がお互いの考え方を知ることができ、共通理解できた」等の評価であった。また、看護師が校外学習、泊を伴う行事の校内体制マニュアルや気管切開のある子どもの緊急時マニュアルを作成することを支援し、「緊急時の個別マニュアルができ、緊急時の動きがわかりやすくなり、不安が軽減した」「目安ができて動きがわかりやすくなった。教諭と共通理解できるようになった」等の評価であった。

【考察】

看護師と教諭が医療的ケアを実施する特別支援学校における共通の課題が明らかになり、支援として、医療的ケアにおける基本的な考え方や各職種の役割の理解を促すこと、看護師、教諭、養護教諭と一緒に話し合う機会を作ること、医療的ケアの必要な児童生徒の行事や緊急時に対応する各職種の役割が明確に提示された個別のマニュアル等を作成することが有効と考える。科研費の基盤Cを受けて実施した。